学都屋台食談

第2回 石川県立大学 学長 西澤 直子氏

金沢で過ごす学生生活の意義や仕事観・人生観を、講師と学生が語り合う「学都屋台食談」を11月15日から11月25日にかけて、金沢市の片町中央味食街で開催しました。2006年から今年で14年目を迎えた食談で、講師の方々が語ったメッセージを紹介します。

何事も全力を出し切れば道は拓ける

金沢の〝美しさ〟を求める意識の高さは全国でも屈指

私が初めて金沢を訪れたのは約25年前です。金沢駅前のビジネスホテルのようなところに宿泊した際の朝食で、出し巻き玉子を目の前で仕上げる演出に、とても驚いたのを覚えています。このようなエピソードは枚挙に暇がなく、金沢の食に対する意識の高さがうかがえました。

感心させられるのは、食べ物だけではありません。金沢は〝美しさ〟のセンスにあふれています。

例えば、金沢駅です。私は研究者として全国各地を訪れる機会があります。いろんな駅を見てきましたが、金沢駅ほど格調の高い駅はありません。構内には、九谷焼や金箔、加賀友禅など伝統工芸品が随所にちりばめられています。そして、兼六園口には、「鼓門」と「もてなしドーム」があります。世界で最も美しい駅14選に選ばれるのも納得であり、アートを愛する金沢の人たちの矜持を感じさせます。

互いの文化の理解が意思疎通に不可欠

ところで、皆さんは外国を訪れたことはありますか。私は約20年前にニューヨークにあるロックフェラー大学で1年半、研究に没頭しました。

アメリカでの生活でカルチャーショックを受けたのは、安全・安心に対する考え方です。拳銃を使った事件も少なくなく、大学の宿舎も警戒がとても厳重で、どこに行くにも警備員がチェックしていました。日本では安全・安心はタダであるのが当たり前でしたから、否が応でも生活環境の違いに目を向けなければならず、そのありがたさが身に染みました。

また、英語で話していても、アメリカ人をはじめとして世界各地から来ている同僚たちに真意が伝わらない経験もしました。会話の中で人に物事を伝えることを氷山に例えると、日本人同士なら海面から出た氷を説明するだけで会話は成り立ちます。しかし、文化が異なる人たちには氷山全てを説明する必要があります。文化の違いが隔てる壁は大きく、意思疎通には互いの文化の理解が欠かせません。

少し上の目標を設定し一歩ずつクリアしていく

間もなく皆さんは社会人になります。これまでの人生よりも、これからの人生の方が長いので、思い切って自分のやりたいことに取り組んでください。

私が生きる上で心にとどめてきた言葉があります。

「自分ができることより、少し上のことを目指してやりなさい」。

これは、大学のスキー部の先輩からのメッセージです。最初から高い目標を立てると、やり遂げることは難しく、前へ進むことができません。手が届きそうな目標は努力すればクリアでき、一歩ずつ上の目標を目指せばいいのです。

学問でも仕事でも、自分の置かれた立場で最大限の努力をすれば、成否にかかわらず何かが身につき、新たなステージに移ることができます。そのステージを歩くうちに、自分が進むべき道がはっきりと見えてくるでしょう。

社会に出ると経験したことのない場面の連続です。壁にぶつかることもあります。でも、いつか壁は乗り越えられますので、あきらめないでください。

参加学生　前列左から、橋本明日香さん（金城大学4年）、村上宗駿さん（金沢医科大学4年）、後列左から、佐治寿一さん（金沢工業大学3年）、密澤岳さん（石川県立大学4年）、砂子阪将大さん（金沢大学3年）

講師

石川県立大学
学長

西澤 直子氏

にしざわ・なおこ

1945年、愛知県一宮市生まれ。東京大学農学部農芸化学科卒業。米国ロックフェラー大学植物分子生物学研究室研究員、東京大学大学院農学生命科学研究科教授などを経て、2009年、石川県立大学生物資源工学研究所教授に就任。生物資源工学研究所所長、名誉教授、特任教授などを歴任し、2019年4月から現職。

企画／㈱アドマック　編集／㈱都市環境マネジメント研究所

石川県立大学
Ishikawa Prefectural University